

学位論文題名

『貫之集』の諸本研究

学位論文内容の要旨

本論文は平安時代の歌人紀貫之(870頃-945)の和歌約900首を収める私家集『貫之集』の諸本の本文を比較してその祖形に遡及することを目的としている。

本論文は、1(『貫之集』九卷本諸本の系統関係)、2(河野記念文化館蔵本『貫之集』について)、3(『貫之集』の九卷本諸本の祖形)、4(九卷本祖本・西本願寺本・御所本の異文対立)の4章と『貫之集』の九卷本諸本の校本「九卷本祖形『貫之集』の校本」等の本文資料からなり総字数約550000字である。

『貫之集』の諸本は通例3類に分ち、歌仙家集本(九卷本)・西本願寺本(十卷本)・御所本(七卷本)を各系の代表本とする。

1章で扱う諸本は、歌本(正保版歌仙家集本)・陽本(陽明文庫本)・桃本(桃園文庫本、以上九卷本系)・西本(西本願寺本)・御本(御所本)の5本である。この5本の巻1・2の本文を比較すると

御本	⇔	西本・陽本・桃本・歌本	147例
西本	⇔	御本・陽本・桃本・歌本	139例
西本・御本	⇔	陽本・桃本・歌本	127例
西本	⇔	御本 ⇔ 陽本・桃本・歌本	109例

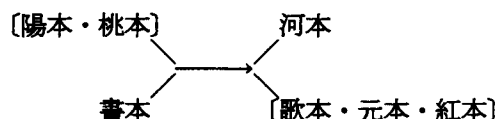
の対立が顕著であり、西本・御本・九卷本系(陽本・桃本・歌本)の鼎立が実証される。さらに、九卷本系諸本の関係を見るために、改めて 歌本・陽本・桃本・書本(書陵部本)・紅本(紅梅文庫本)・元本(元禄13年版本)・河本(河野記念文化館本)の7本の本文を比較すると、

河本	⇔	陽本・桃本・書本・歌本・元本・紅本	176例
桃本	⇔	陽本・書本・河本・歌本・元本・紅本	88例
陽本	⇔	桃本・書本・河本・歌本・元本・紅本	66例
陽本・桃本・書本	⇔	河本・歌本・元本・紅本	64例
陽本・桃本	⇔	書本 河本・歌本・元本・紅本	21例
書本	⇔	陽本・桃本・河本・歌本・元本・紅本	20例

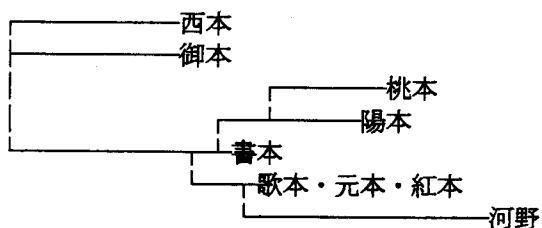
の対立が顕著であり、

陽本・桃本・書本・河本	⇔	歌本・元本・紅本	10例
-------------	---	----------	-----

の対立も見られることから7本の関係は



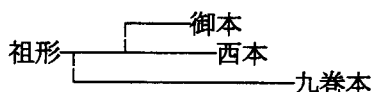
となる。このうち上記矢印「→」で示した対立には、左方優位の本文があると認定され、これに基づき3通りの系統図を提示することができるが、上記3系鼎立を考慮すれば



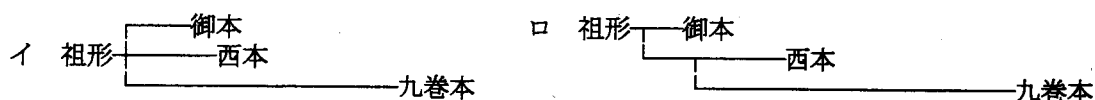
の形で示すことができる。

2章では歌仙家集本系の中では、他の本と余りにも掛け離れている河本の位置を明らかにする。歌本・陽本・桃本・書本・河本・西本・御本の7本の歌本文のみについて異同を見ると、「河本・西本 ⇔ 御本・他の九巻本」「河本・西本 ⇔ 御本・他の九巻本」「河本・西本・御本 ⇔ 他の九巻本」の対立は少なく、また河本の独自異文には優位と認められるものがないことから、河本は九巻本系の末流本文と断定できる。

3章では、陽本・桃本・書本・歌本・西本・御本の6本の本文の比較を詳細に記述し、共通異文中の「陽本・桃本・書本・歌本 ⇔ 西本・御本」の対立391例の中に陽本等の方が優位のものが127例、西本・御本の方が優位のものが40例あることから、この異文対立の中間に祖形との接点があるものとの予測を提示し、九巻本の本文原形を復元する。この予測は



であるが、



の可能性も否定しない。

4章では復元九巻本、西本、御本の本文を比較・分析する。また近年公開された素本(冷泉家素寂本)については「西本・承本 ⇔ 素本・九巻本」「西本・素本 ⇔ 承本・九巻本」の両様の対立があることから、いずれかに合成本文のある可能性を指摘している。

最後に、現状での慎重な結論として上記(イ)の形を提示する。そして、その方向での本文校訂のための素料として、復元九巻本を底とした校本を付載する。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宮 澤 俊 雅
副 査 教 授 後 藤 康 文
副 査 助 教 授 佐 藤 淳 二

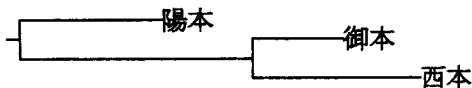
学 位 論 文 題 名

『貫之集』の諸本研究

本論文と先行研究の違いを、ここでは本論文筆者の遡源本文と先行研究者の田中登(『校訂貫之集』1987)の校訂本文との比較により示して置く。田中は陽本を底本として対立異文を次のように処置している。

		採用	不採用
陽本独自異文	365	189(陽本)	196
御本	180	5(御本)	175
西本	233	6(西本)	227
鼎立異文	202	202(陽本)	

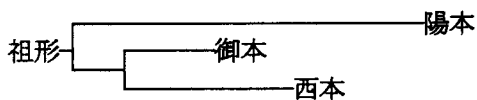
田中は、結果として諸本の系統を次のように設定してしまったことになる。



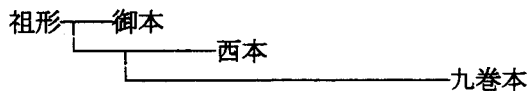
本論文の筆者は優劣判定を控え気味であるが、基本的には

		採用	不採用
陽本独自異文	365	127 以下(陽本)	238 以上
御本	180	? (御本)	180?
西本	233	? (西本)	233?
鼎立異文	202	?	125?(陽本)

となっており、ほぼ次のような系統を想定している。



これによれば、田中の校訂本文に比して、300例以上の異文について、善本文の遡上に成功している。今後さらに慎重に校訂を進めれば、次の形に決着するものと見込まれる。



本論文は『貫之集』の諸本の系統関係を確定し、その本文について従来より大幅に善本文へ遡源することを可能にしておき、今後の『貫之集』研究にとって欠くことのできない論考であると考えられる。この意味で本論文は『貫之集』研究・和歌史研究を進展させるものである。審査担当者は全員一致してラガワチャリヤ ハリ氏に博士(文学)の学位を授与するのが至当であるとの結論に達した。